

西田彰一著

『躍動する「国体」——寛克彦の思想と活動』

(ミネルヴァ書房・二〇一〇年)

植村 和秀

東京帝国大学法学部の憲法学者として政治思想史・政治史・憲法学史上に著名なのは、美濃部達吉と上杉慎吉の二人であろう。両者の憲法学説の対立は、近代日本における憲法理解、国体論、国家構想の争点を示すものとなり、一九一二年の天皇機関説論争から上杉没後の一九三五年の天皇機関説事件に至るまで、さらにはそれ以後にも、きわめて重大な政治的意味を持ち続けたからである。

しかし、東京帝国大学法学部には彼らと同世代の憲法学者がもう一人いた。寛克彦である。一八七三年生まれの美濃部、一八七八年生まれの上杉に対し、寛は一八七二年の生まれである。一九〇三年から一九三三年まで寛は法学部に教授として奉職し、長きにわたって、美濃部や上杉の同僚であった。ただ今日、寛の名前は神がかりの奇矯な人物として微かに伝えられる程度になっている。

その寛に真正面から取り組んだのが、本書である。寛には、たんなる奇人として片付けるには魅力と影響力がありすぎた。著者は、南原繁が寛に抱いた敬愛の念に接して研究に着手し(二五四頁)、貞明皇后の熱烈な支持など、意外なほどに寛が発揮した影響力を追跡していく。そこで注目したのが、寛の「神ながらの道」思想の形成過程と、その活動によって政治的に「何を実現しようとしたのか」、そして、「教え子たちとともに自らの思想を広めた経緯」なのである(一八―二〇頁)。

「憲法学者でありながら、国民の生命力や活力を重んじる「古神道」「神ながらの道」を唱え、国民の宗教的な信仰の拠り所として天皇を位置づけるという非常に特異な思想」(六頁)が、どのように形成され、どのような行動となり、どのように広がっていったのか。このように問う著者は、はしがきで、森鷗外の小説「かのやうに」に言及する。国体神話と歴史との関係に悩む主人公に対し、突貫していく意欲を求める友人の言を踏まえて、著者はこう述べている。

「神話と事実が異なるのなら、むしろ神話が事実である。「かのやうに」信じることで、認識を都合よくあらためていく。さらにこの「かのやうに」の思想を本気で信じ、真剣に行動することで、「かのやうに」の虚構は「いのち」を吹き込まれ、やがて本物になると寛は「前向き」に考え、信じていたのであった」(ii―iii頁)。

さて、寛の生き方がこのようなものであるならば、寛の憲法

学はたしかに、思想史の側から分析した方が理解しやすい。なお本書は、総合研究大学院大学に提出の博士論文に加筆修正が行なわれたものであり、その分析は、寛の内面から外面へ、そしてその周囲へと堅実かつ丁寧に進められている。

二

本書は、三部七章を本体として、はしがきと序章、終章とあとがきその他で構成されている。巻末には寛の年譜があり、稀少な雑誌である『皇学会雑誌 神ながら』と『いやさか』の目次が収録されている。

はしがき

序章 戦前における国体論の展開と寛克彦

第一部 国体思想にいたる道程

第一章 心理、生命、そして宗教

第二章 「古神道」の形成と天皇機関説論争

第二部 国民教化の試み

第三章 『神ながらの道』頒布と皇学会

第四章 神社行政へのはたらきかけ

第三部 国体思想の実践と展開

第五章 〈やまとはたらき〉の実践と普及

第六章 「誓の御柱」の建設とその広がり

第七章 植民地における取り組み

終章 寛克彦の思想の帰結と独自の国体論

あとがき

各章の内容については、著者による丁寧な要約があり、全体像の把握に簡便である（二一～二四頁、二四三～二四七頁）。序章では先行研究との関係が整理され、「寛克彦を論じることの意味」が問いなおされている（一八頁）。そのうえで、第一部では寛の思想形成の過程が追跡され、第一章では一九〇〇年代、第二章では一九一〇年代の思想形成が検討される。そこでの鍵概念は宗教であり、具体的には日本の国教である。

寛は、「共同体を結合し、有機的に作用させるには人々の内心からの主体的参加が必要である」と考え（二二頁）、「自発的な国家への関心を維持し機能させるには、国教を確立し、国家に対して宗教的な信仰に近い信頼を持たせなければならない」と判断した（二四四頁）。つまり寛は、住民と国家との内面的なつながりを重視し、そのつながりを国教によって強固にしようと考えたわけである。これは寛が、国民国家建設を自己の生涯の課題とした、ということであろう。

国民国家建設は主権国家建設とともに、近代国家建設に必須の政治課題である。天皇機関説論争は日本における主権国家のあり方をめぐる論争であり、これに対して寛が「独自の立場」（七七頁）を有したとの著者の見解は、主たる課題の違いとしても理解できるであろう。

また、第三部で追跡された日本体操の普及活動や記念碑の建設運動は、ヨーロッパの国民国家建設の諸事例と似た動き方であり、この方向での政治学的・歴史学的な比較研究が可能であると思われる。

さらに、寛が国教を検討してまず仏教に注目し、その後、「仏教伝来以前の日本古来の宗教を「発見」(二二頁)して、古神道や神ながらの道と呼ぶに至ったことは、国民国家と宗教、ナショナリズムと宗教の関係の一事例としてきわめて興味深い。著者は、この古来の宗教は「ほとんど寛の「発見」といつてよい」としている(二二頁)。まさにそれゆえに、第二部と第三部で、「発明」を信仰とするために寛たちがどのような努力を重ねたかが追跡されるわけである。

第二部では、寛の活動内容が検討されていく。第三章では、貞明皇后が寛に心からの信頼を寄せた経緯について、一九二四年の御進講と御下問の内容が検討される。この信頼は皇后からの講義録出版の提案となり、『神ながらのみち』皇后宮職版が一九二五年に刊行され、翌年には内務省神社局版二万数千部が刊行される(一〇四頁)。その勢いに乗って寛は、一九二八年に『皇学会雑誌 神ながら』を大規模に発刊し、自己の思想の普及に乗り出すのである。

第四章では、一九二九年設置の内務省神社制度調査会や一九三五年設置の文部省教学刷新評議会で、寛が委員としてどのような提案を行なったかが検討される。内務省の消極的な神社行

政に不満を持つ寛は、神社を国教とする政策への転換や、神祇府の新設による宗教的な教学の実現を求めた。いずれも他の委員の賛同を得ることができず、「黙殺」(二三八頁)されたものの、寛は自己の思想にひたすら忠実に、実践へと進んでいた。その詳細が追跡されるのが、第三部である。

第三部では、寛の影響力の広がりが見え追跡される。第五章の主題は、寛が一九二〇年代に提案した思想的体操である「やまとはたらき」である。寛は、「より宗教の理想に近づき、これを表現する人として生きるために」、「体操と神道の祈禱を組み合わせた身体技法」を発明した(一四五頁)。この体操は貞明皇后や貴族院議員の二荒芳徳に支持されるとともに、加藤完治によつてその関係する多数の農業教育機関、さらには満蒙开拓青少年義勇軍訓練所に導入されていく(二六六―二六七頁)。

第六章では、内務官僚の水上七郎による琵琶湖多景島での「誓の御柱」建設の経緯が追跡される。滋賀県警察部長であった水上は、五箇条のご誓文と「天晴れ」^{あつぱ}「あな面白」^{おもしろ}「あな手伸」^{たの}「あな明けおけ」^{いやすか}「弥栄」という寛思想の鍵となる言葉を刻んだ五角形の尖塔建築事業を強行した(一七六頁)。広く国民から寄附を募ることに固執して行き詰まったものの、貞明皇后の寄附と支持によつて、御柱は一九二六年に完成する。

さらに、同年の水上逝去後も、二荒を会長とする弥栄会、後の大日本弥栄会によつて事業は継続され、全国七ヶ所に「誓の御柱」が建設された(一九三頁)。この会を二荒とともに担っ

た瀧本豊之輔や渡辺八郎もまた、寛に心服する東京帝国大学での教え子である。

第七章では植民地での活動が追跡される。寛に心服する人脈として、著者は、斎藤実朝鮮総督の秘書官で内務官僚の守屋栄夫、朝鮮神宮司の高松四郎、台北帝国大学の増田福太郎、井上孚磨^{たかまろ}の名前を挙げている(二〇三頁)。彼らの縁もあつて実現した寛の現地講演は、日本民族が模範となつて「神ながらの道」へと現地住民を教化するという趣旨のものであり、「内地出身のエリートたち」に歓迎されている(二二六頁)。他方、満洲国との関係では、加藤とのつながりに加えて、建国大学の創設委員就任や皇帝薄儀への御進講があつた。寛は一九四四年の新京で神ながらの道を説き、皇帝にも現地要人たちにも理解はされなかつたようである(二二四頁)。

終章で著者は、一九三〇年代半ば頃から寛とその関係者の活動が低調になつていくと指摘する(二二七頁)。星野輝興や里見岸雄による寛神道批判、天皇機関説事件に伴う学説の軌道修正、『皇学会雑誌 神ながら』の一九三九年での途絶など、寛の影響力は明らかに減少していき、戦後はますます減少して今日に至つたのである。

著者は最後に、寛の思想とは、国体という「国の枠組みがある」「かのやうに」振る舞い、それを保ちつつ、「国体」の中身を、天皇と国民の生命力によつて充足させ、「国教」によつて糾合し、国全体を躍動させよう」とするものであり、その活

動は「躍動を正しく導くための」ものであつたと総括する(二四八頁)。そしてその国体論が、「既存の秩序の枠組み」を前提とするがゆえに「皇族や既存の社会的エリート層に支持され」、既存の秩序の危機への対応能力に乏しいがゆえに限界に突き当たつた、と判断するのである(二四八頁)。

三

本書を通して重大に感じるのは、はしがきで言及された「かのやうに」の問題提起である。「神話が事実である」「かのやうに」信じ、「かのやうに」の思想を本気で信じ、真剣に行動することとは、可能なのだろうか。本気で真剣なのであれば、神話は信仰上の事実となるであらうし、「かのやうに」という心残りがあれば、それは知的な判断に止まり、死を賭してもよい情熱を燃え立たせられないのではないか。それとも、知的な自己満足こそが寛の信仰の本体なのだろうか。

著者が本書で再三指摘しているのは、寛の奇妙な軽さである。仏教から古神道への理論軸の転換は、「あまりにもあつさり」と行なわれている(六四頁)。天皇機関説事件を受けて憲法学説を天皇主権説的に修正した際も、「あつさり」と時代の状況に流されていくように見える(二四九頁)。「いやさか」という寛神道の鍵となるかけ声にしても、歴史的根拠は「容易に変更」されてしまう(二三〇頁)。日本皇国という人格者の大生命の活性化が第一であるとしても、主張の真摯さに不信任を

抱くほどに、「あまりにもあつさり」と変説するのである。

しかし寛は、大学の学生にも委員会の委員にも、貞明皇后にも満洲国皇帝にも「神ながらのみち」を説いている。本気で真剣でなければ、そのような行動はできないであろうし、心服して身を削ろうとする人たちが多数出現するはずもない。それゆえ少なくとも、寛の人格的な感化力を否定することはできない。ただ、新宗教の教祖たちのように、広く信者を獲得し、熱狂させることはできていない。

著者が終章で「国の枠組みがある「かのやうに」振る舞い、それを保ちつつ」とするのは、寛の信仰が宗教的な情熱にではなく、知的な判断に立脚したものであり、そこに寛の特徴と限界がある、という評価なのだろうか。実際、寛の説く日本神話は合理的なものに、つまりは近代人が知的に理解しやすいものにされている。著者は、「かのやうに」の虚構は「やがて本物になると寛は「前向き」に考え、信じていた」とはしがきで述べているが、むしろ、寛はこぢんまりとした自己の思想に自己満足し、そこで思考停止したのではないか。ここは、さらに掘り下げた著者の見解をぜひ聞きたいところである。ここには、信仰と知性、宗教と近代の関係という問題があるからである。

さらにここには、時代の環境と人間の欲求の関係という問題もあるであろう。著者は本書で、国体論の動揺や宗教復興現象、天皇崇敬形成を時代背景として指摘している（一八―二〇頁）。これらは、政治的に重要な問題であるとともに、当時の

人間の内面生活を反映しているはずである。自己の發明を臆面もなく正解と主張する寛の内面には、自我意識の極大化と絶対への欲求、自我の矛盾を知的に解消しようとする意欲が感じられる。この内面の特徴で評者が近いと感じるのは、原理日本社の同人たちである。

寛に心服した憲法学者の井上孚庵は、原理日本社の主要な同人でもあった。また、『原理日本』誌の前身である『人生と表現』誌の第九巻第九号（一九二二年一月）掲載の読者名簿には、井上とともに寛の名前がある。また、『原理日本』誌第七巻第二号（一九三一年一月）の誤植について、謝罪の印刷葉書が蓑田胸喜名義で寛宛に出されている（評者蔵）。購読なのか贈呈なのかは不明ながら、蓑田たちとのつながりは存在する。

著者は、蓑田が寛の著作を愛読し、両者は「コインの表と裏」の関係にあると指摘している（三一―六頁）。ここにはさらに、蓑田の師である三井甲之を加えてもいいのではないか。弾劾に熱心な蓑田、弾劾もするし信仰も説く三井、弾劾をせず信仰を説く寛は、みな自我と絶対とが矛盾する悩みを、日本という大生命に合一することで解決したと自称する。彼らは他者の存在を否定し、宇宙的な日本の大生命を自己が表現すると信じているのである。

それゆえ著者が強調する「躍動」も、他者と関わって現実を変革しようとする動きではなく、手を振り足を踏み、声を出して日本に生きる喜びを表す動きなのである。まさに日本体操

である。これはたとえば健康の思想史に位置づけられる気もあるし、個人的には、寛が上手に体操できたのか、どんな心持ちで体操をしていたのか、とても気になってしまう。また、寛が作成する奇妙な図の意味についても、もっと詳しく知りたい。こちらは、絵解きの思想史の文脈に乗せることができるのではないだろうか。

本書によって寛の思想と活動は、その置かれるべき文脈を探し出せる地点にまで引き出された。逆に言えば、本書は、さまざまな文脈上で寛を活用できる状況を整えてくれたのであり、この意味でも貴重な研究成果であると考ええる。「かのように」の問題をずいぶんと特筆してしまったが、現実には、寛の心の奥の奥を明らかにすることは難しいと思う。しかし、それでも知りたくなるほど、この問題は、近代日本の国体論の底の底に潜んでいるように思うのである。

（京都産業大学教授）